

マンガ読解時における内声化

○春山はな乃・吉田萌子・上田涼花・武本裕紀・松崎咲歩
(広島大学教育学部)

問題と目的

内声化とは頭の中で文章を音読する活動である(森田・高橋, 2019)。文章読解時に内声化を行う読み手が多いことや、内声化時の声の質に個人差があることが明らかになっている(Alderson-Day et al., 2017; Vilhauer, 2017)。本研究では、マンガ読解時と物語読解時の内声化について実態調査を行った(研究1)。さらに、内声化の個人差によって、読み速度や生成するイメージの鮮明性が異なるかを検討する実験を行った(研究2)。

研究1：物語とマンガ読解時の内声化

方法 参加者 クラウドソーシングサイトに登録している成人494名(平均年齢41.0歳)。

調査内容 物語とマンガ読解時に、会話部分のように読むかについて、どの程度内声化を行っているかを5段階で、内声化時の声の具象性についてTable1の4つの選択肢から回答させた。

手続き Google Formを用いたオンライン調査であった。

結果と考察

内声化の程度については、物語でもマンガでも、「ほとんど読み上げる」人が約半数、「全て読み上げる」人が約1/4であり、物語とマンガで、内声化の生じやすさは類似していた。声の具象性について、各選択肢の選択者数をTable1に示す。物語とマンガで回答者数に大きな違いはなかった。これらの結果から、マンガ読解時にも内声化のしかたに個人差があることが明らかになった。

研究2：内声化タイプによるマンガ読解の違い

方法 参加者と実験計画 大学生・大学院生43名(平均年齢20.8歳)。独立変数は、参加者の内声化の程度と内声化時の声の具象性であった。調査に基づき、参加者を、全て内声化する群、ほとんど内声化する群、内声化をあまりしない少群の3群

に分けた。また、声の具象性についても、複数の明確な声群、複数の不明確な声群、1種類の声群の3群に分類した。従属変数は、マンガ1話あたりの読み時間(秒)とイメージ鮮明性の5段階評定値(VVIQ日本版;菱谷, 2005)であった。

マンガ刺激 予備実験を行い、4作品3話ずつ計12話の4コママンガを選定した。

手続き PCのモニターに呈示される4コママンガを1話ずつ自己ペースで読んでもらい、読み時間を測定した。1話ごとに、イメージ鮮明性と、補足的に内声化の程度、声の具象性を回答させた。それを12試行繰り返した。

結果と考察

内声化の程度3群の結果をTable2に示す。1要因分散分析の結果、読み時間については、「全て」群、「ほとんど」群、内声化少群の順で、読み速度が有意に長かった。3群のイメージ鮮明性得点に有意差はみられなかった。ただし、内声化の程度とイメージ鮮明性得点との相関係数は $r = -.264$ ($p < .10$)であった。

声の具象性3群の結果をTable3に示す。読み時間についても、イメージ鮮明性についても、群間に有意な差はみられなかった。

総合考察

研究1では、物語とマンガ読解時の内声化のしかたには類似性があることを明らかにした。研究2では、内声化の程度によってマンガの読み方が異なることを明らかにした。一方で、声の具象性が読み方と関連するとは言えない結果であった。

Table 2. 内声化の程度3群の読み時間とイメージ鮮明性

	読み時間(秒/話)		イメージ鮮明性	
	平均値	SD	平均値	SD
全て内声化(n=11)	18.38	(4.26)	4.17	(0.54)
ほとんど内声化(n=19)	14.08	(3.47)	3.90	(0.49)
内声化少(n=12)	10.40	(2.94)	3.78	(0.55)

Table 3. 声の具象性3群の読み時間とイメージ鮮明性

	読み時間(秒/話)		イメージ鮮明性	
	平均値	SD	平均値	SD
複数の明確な声(n=15)	13.82	(5.08)	3.93	(0.52)
複数の不明確な声(n=20)	14.97	(4.69)	4.01	(0.57)
1種類の声(n=7)	12.54	(2.77)	3.73	(0.42)

Table 1. 物語とマンガ読解時の声の具象性

回答	物語読解時		マンガ読解時	
	人数	(%)	人数	(%)
複数の声で再生, 違い明確	145	(9.2)	167	(6.4)
複数の声で再生, 違い不明確	223	(15.7)	221	(14.1)
1種類の声, 声が明確	45	(29.6)	33	(34.1)
1種類の声, 声が不明確	77	(45.5)	69	(45.1)